



Terima Kasih! Kg. Sinisian (ありがとう！シニシアン村)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
財団法人鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会 会長

弓場秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年にマレーシアに派遣以来15回目を迎えた。この事業は、青少年を開発途上国に派遣し、そこの国づくり人づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動を体感することで国際協力に対する理解を深めてもらうとともに、ホームステイや学校等での交流を通して国際性豊かな青少年を育成することを目的とし、青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会の3者により構成された実行委員会で実施している。

派遣国として、鹿児島県出身協力隊員が活動中の複数国を検討した。しかし鳥インフルエンザ感染の危険と経費の面で断念。マレー系・中国系・インド系、そして多数の先住民族が住み、独自の言語・宗教・文化を有す多文化共生社会マレーシアに、鹿児島市・枕崎市・霧島市・知覧町推薦の7名、企業の協賛を得ての実行委員会推薦5名を、2回の事前研修を経て平成18年7月22日-29日(7泊8日)派遣した。

2020年に先進国入りを目指すマレーシアは、首都クアラルンプール周辺を中心に発展するマレー半島と、多数の先住民族が住み経済的には遅れるボルネオ島から成る。今回のホームステイ先はボルネオ島サバ州。標高4095m東南アジア最高峰キナバル山の麓、先住民族ドゥソン族が住むシニシアン村に4泊5日滞在した。滞在中は、村の主産業である農業の手伝い、特産の竹製楽器による伝統音楽の学び、地元クンダサン小学校・中高校での交流、そして理学療法士と木工技術で派遣されている協力隊員の活動現場訪問、と少しでも多くの事を体験出来るよう欲張りな日程を組んだ。

12名の団員は、村人の心優しいもてなしで言葉、習慣の壁を乗り越え、家族の一員として受け入れられた。異文化交流には、言葉と同じようにあるいはそれ以上に大切なものが有る事を体感した。現地に深く溶け込み、草の根の国際協力を実践している協力隊員を遠い存在を感じていた団員は、隊員との語らいの中でその実像に触れ、将来の選択肢の一つとして考えるようになった。

マレー半島では、鹿児島との関係が深い古都マラッカで、薩摩人ヤジロウが1547年マラッカに渡り、キリスト教宣教師フランシスコ・ザビエルを1549年鹿児島に導いたその足跡を訪ねた。また国際協力機構JICAマレーシア事務所では、日本がマレーシアで取り組んでいる国際協力の現状と将来について学び理解を深めた。

最後に、中高生が初めて訪れたマレーシアでの体験、想いが綴られたこの報告書「Terima Kasih! Kg. Sinisian」が同世代をはじめ多くの皆様の目に触れる事を希望しますと共に、事業実施に当たりご支援ご協力頂きました共催市町、協賛企業、国際協力機構JICAを始めとする関係者に心より感謝申し上げます。

もくじ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場秋信

はじめに	
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場秋信	
ごあいさつ	1

　　鹿児島県商工労働部観光交流局長 庭田清和

第15回（平成18年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
--------------------------------	---

参加団員等名簿	3
---------	---

スケジュール	4
--------	---

地図	5
----	---

体験事業ドキュメント	6
------------	---

　　～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと	14
----------	----

　　「夢の国マレーシア」 増留弘亮

　　「Terima kasih !!」 北園優歩

　　「感動！私を変えた7泊8日」 白石ともみ

　　「マレーシアを訪ねて」 藤野真登

　　「青年海外協力隊の視察とホームステイに参加して」 村田友香

　　「私のマレーシア体験」 新富由利

　　「この事業に参加しての思い出」 峯苦裕子

　　「ビバ！同胞」 縁川菜々

　　「国際協力とは」 蓮子梨那

　　「異文化の暮らしに触れて」 丸久あかね

　　「私を変えたマレーシア」 吉満瑞貴

　　「国際協力に触れて」 田畠梓

団長報告	26
------	----

　　弓場秋信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長）

同行者感想	27
-------	----

　　「団員の成長」 上片平文裕（財鹿児島県国際交流協会 総務企画課長）

　　「心つながる感動体験」 田邊ツル子（青年海外協力隊OG、喜入中学校教諭）

　　「カラダとココロで国際協力」 原奈美（青年海外協力隊OG、JICA国際協力推進員）

　　「成長うれしい夏」 藤本祐希（南日本新聞社 社会部記者）

　　「日本とシニシアン村の架け橋に」 松本久美（KKB鹿児島放送 報道制作部記者）

新聞記事（南日本新聞）	32
-------------	----

参考資料	36
------	----

　　「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

　　「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ごあいさつ

鹿児島県商工労働部観光交流局長

庭 田 清 和

平成18年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや地元中高校生との交流などを通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的とした全国でも画期的な事業です。

また、県では、アジアをはじめとする各国との国際交流ネットワークの形成を目指して、様々な施策を積極的に推進していますが、本事業は、その趣旨とも合致する意義ある事業であると思っております。

現在の国際社会を見ますと、民族的・宗教的対立、紛争やテロ、環境問題など様々な問題が発生しております。これらの問題を解決していくためには、一人ひとりがそれぞれの国や地域の文化・習慣・考え方などについての相互理解を深めるとともに、自分ができるところから国際協力にも取り組んでいくことが必要であると考えます。

このような中、今回の体験事業では、8日間の日程でマレーシアのサバ州（ボルネオ島）を訪問し、現地に派遣されている青年海外協力隊員の活躍する姿を目の当たりにし、また、ホームステイや農業体験等を通じて現地の方々との心のふれあいを体験することにより、国際協力や相互理解の必要性、重要性を痛感されたのではないかと思います。

この貴重な体験を糧として、これからも海外のことに目を向け、自分でできること、身近なことから国際協力に取り組んでいただき、皆さんが世界に通用するたくましい若者に成長することを心から期待しております。

また、この体験を御家族や友人、あるいは地域の方々にもお話しして、多くの人に国際交流や国際協力に関心を持っていただけることを期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、関係者皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第15回（平成18年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

1 主催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

※ 構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

2 共催 鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町

3 後援 鹿児島県

鹿児島県教育委員会

独立行政法人国際協力機構 九州国際センター

4 協賛 (財)古謝育英会

(株)鹿児島銀行

鹿児島空港ビルディング(株)

鹿児島トヨタ自動車(株)

小正醸造(株)

薩摩酒造(株)

長島商事(株)

南国殖産(株)

(株)山形屋

弓場貿易(株)

5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定

6月17日（土） 第1回事前研修

7月8日（土）～9日（日） 第2回事前研修

7月22日（土） 出発

7月29日（土） 帰国

8月2日（水） 帰国表敬訪問

8月19日（土） 帰国報告会

9月～10月 報告書作成

参加団員等名簿

■団員

	名前	性別	学校名・学年	推薦市町等
1	ます 増 留 弘 亮	男	鹿児島県立 甲南高等学校 2年	鹿児島市
2	きた 北 園 優 歩	女	鹿児島市立 鹿児島玉龍高等学校 1年	鹿児島市
3	しら 白 石 ともみ	女	鹿児島大学教育学部 附属中学校 3年	鹿児島市
4	ふじ 藤 の 野 まさ 登	男	枕崎市立 枕崎中学校 2年	枕崎市
5	むら 村 田 友 香	女	枕崎市立 枕崎中学校 1年	枕崎市
6	しん 新 富 由 り 利	女	鹿児島県立 蒲生高等学校 2年	霧島市
7	みね 峯 苛 裕 子	女	鹿児島県立 加世田高等学校 2年	知覧町
8	みどり 緑 川 菜 々	女	鹿児島県立 大島北高等学校 2年	実行委員会枠
9	はづ 蓮 子 梨 那	女	鹿児島県立 穎娃高等学校 1年	実行委員会枠
10	まる 丸 久 あかね	女	鹿児島県立 串木野高等学校 1年	実行委員会枠
11	よし 吉 満 瑞 貴	女	鹿児島県立 甲南高等学校 1年	実行委員会枠
12	た 田 畑 あづさ 梢	女	鹿児島県立 松陽高等学校 1年	実行委員会枠

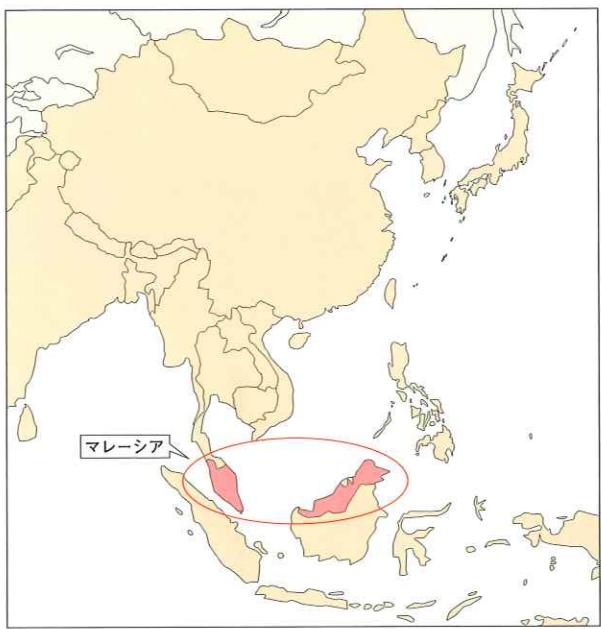
■同行者

	名前	性別	所属	担当
1	ゆみ 弓 場 あき 秋 信	男	鹿児島県青年海外協力隊を 支援する会 事務局長	団長
2	かみかたひら 上片 平 文 裕	男	財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長	会計管理・記録
3	た 田 邊 つる こ 子	女	青年海外協力隊OG 鹿児島市立喜入中学校教諭	健康管理
4	はら 原 な 奈 美	女	青年海外協力隊OG JICA国際協力推進員	記録・調整
5	ふじ 藤 もと ゆう 希	男	南日本新聞社社会部 記者	
6	まつ 松 もと く 美	女	KKB鹿児島放送報道制作部 記者	

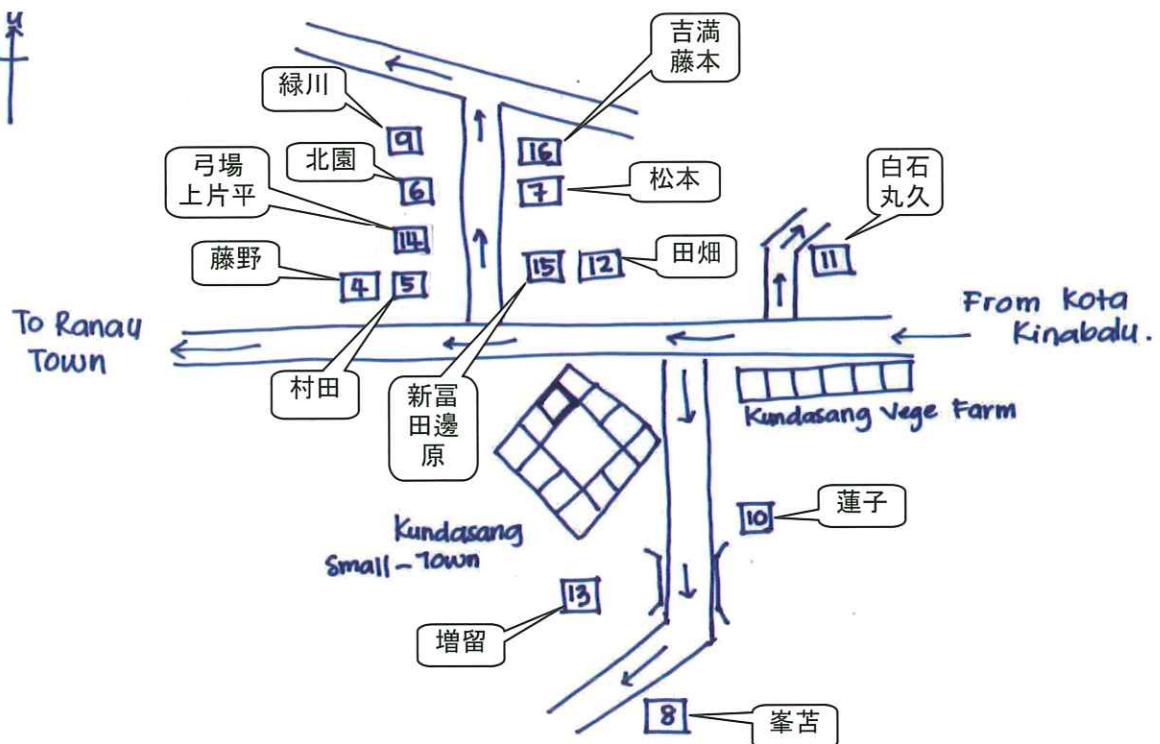
スケジュール

月日	曜日	地名	時間	内容	宿泊
7月22日	土	鹿児島空港 発 福岡空港 着	7:00 7:55 8:50	集合 結団式	クアラルンプール ホテル
		福岡空港 発 マレーシア 着 (クアラルンプール)	11:00 16:25		
7月23日	日	クアラルンプール 発 コタキナバル 着	9:50 12:25	・コタキナバルへ ・ホームステイ先へ移動	ホームステイ
		コタキナバル シニシアン村			
7月24日	月	シニシアン村		●終日ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月25日	火	ラナウ コタキナバル	8:30- 10:30 14:30- 16:00	●青年海外協力隊 活動視察① 中村隊員（理学療法士） ジャランレストハウス ●隊員との懇談会 ●青年海外協力隊 活動視察② 小鳩隊員（木工） モンフォート職業訓練校	ホームステイ
7月26日	水	シニシアン村		●中高生との交流 クンダサン小学校 クンダサン中高校 ●お別れパーティー	ホームステイ
7月27日	木	シニシアン村 コタキナバル		・コタキナバル空港へ移動	
		コタキナバル 発 クアラルンプール 着	10:35 13:00	・コタキナバル→クアラルンプール ・クアラルンプール→マラッカ	マラッカ ホテル
		マラッカ		●マラッカ市内観光、買い物	
7月28日	金	マラッカ クアラルンプール	午前 14:00	マラッカ→クアラルンプール ●JICAマレーシア事務所表敬訪問 ●クアラルンプール市内観光、買い物 →クアラルンプール空港	機内泊
7月29日	土	マレーシア発 (クアラルンプール) 福岡空港 着	0:50 8:00		
		福岡空港 発 鹿児島空港 着	13:10 13:50	解団式	

地図



シニアン村・ホームステイ先



体験事業ドキュメント

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月17日（土）、7月8・9日（土・日）

第1回・第2回 事前研修



この日は私達が出会った日や
みんなと早く仲良くなりたいなア♡



英語いいマレー言語も
カヤソルさん & ハスワンさんの
おかげで少しづつ覚えたよ😊

7月22日（土）

結団式・出発



いいよいマレーシアへ♪
これからはじまる日々にトキトキ・
ワクワクが止まらないッ♪



マレーシア・クアラルンプールに到着



「本当にココはマレーシア!?」と思ってしまう程、
メチャ高層ビルがいっぱい!!
空港内にはモルタルも走っていたよ★☆



7月23日（日）
空路コタキナバルへ



村で披露ぬ出し物の練習♪
明日からはホームステイだね♪

ココヤシジュースは
超まずい!!
ぬるいし薄いし。。。でも全部飲んだ人
もいたよ♪

シニシアン村へ
ホストファミリーと対面



雄大なオバル山と村人達が
和達をち出迎え♪
優しそうなママの笑顔を見て
ちょっと安心したよね☺"

7月24日(月)

家族と一緒に



ホストファミリーと農業をしたり、村を探索したり。。。よ
最初は戸惑っていたけど、少しずつホスト
ファミリーとの距離が縮まっていったね♡



PM 3:00 村の広場に集合♪
子供達と一緒に石や輪ゴム、風船などを
使って遊んだよ。コレが意外に楽しい!
みんな超ハッチャケたあ☆★
すみません少年ともちもじかたよねり笑



夜は村の楽器を使って演奏会♪
まちなりりへなりスム隊と
慣れない楽器を元気張るみんな
莫屈いかったけど楽しかったね
キナバル山の歌とリーダーのダンスが
超最高だったあを笑



7月25日(火)

青年海外協力隊活動視察
中村隊員



中村サンはすごく明るくておもしろい人ー♡
和達にリハビリの方法を丁寧に教えて下さい
またねあ、△"



小嵩隊員



小嵩サンは優しくてスマイルキーー△
自分の仕事に誇りをもって頑張っている姿は
すごく輝いていたよ△+

7月26日(水)

学校訪問



子供達が一生懸命踊りや歌で迎えてくれたよ♪ すぐうれしかった
和達も「ササヤン」でレンガシカンコン!
や日本の歌を歌ったり、おはら節を披露!
自己紹介はみんなテンションが超高くて盛り上がらなかった=3



たくさんのお供達にサインを
求められたみんな!
困りながらも芸能の人気分で
幸せ♪
お供達とも仲良くなれたしね♪



中・高校では「弓矢」や「竹」
を使った遊びにも挑戦!
弓道を教えたり一緒にバスケや
バレーもしたよ☺



お別れパーティー



木々の最後の夜の
キナバル山の歌を演奏したり
踊ったりして楽しかったね☆
だけど村の人達と一緒に
KIROROの「未来へ山を歌った」
時にはザシニアン村にぎり
といたい!って思って号泣
してしまった。。。



7月27日（木）

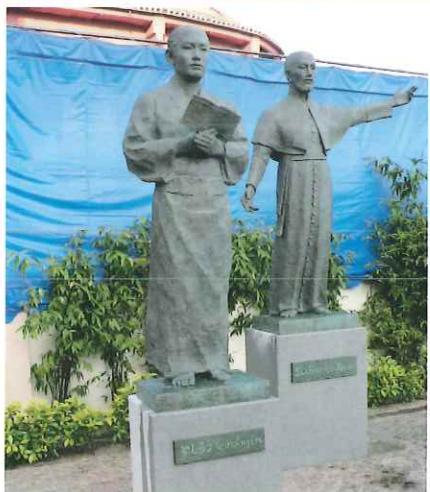
ホストファミリーとの別れ



ついに村を離れる時が来た!!
ホストファミリーと別れたくない、
この村が大好きで泣いちやったよね。
ホストファミリーの方々!本当にありがとうございました。
また会いに来ますから♪

マラッカ市内観光

ドリアンに初挑戦♪
噂通りの強烈なにおいと口に入れた瞬間のタマネギのよーな
すごい味。。ヤバい～と吐きそう
おいしそうに食べなヤツ♪・ラムサン・上片平サンを尊敬します！



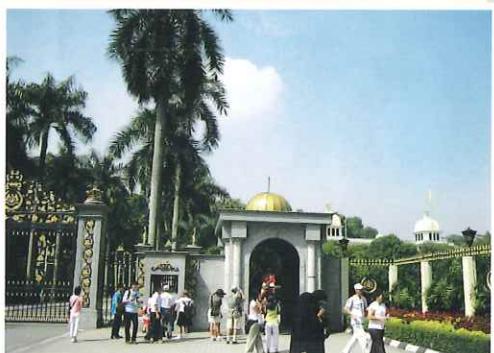
7月28日（金）

JICAマレーシア事務所表敬訪問 クアラルンプール市内観光



マラッカは歴史情緒あふれる街♪
古くて魅力的な建物がいっぱい
あったよ❀
鹿児島ともザビエル×ヤシローで
つながりのある街なのです♪♪

JICAではマレーシアでの十島か隊の活動や
今、特に元気張っている活動などを教えていた
だいたい♪すごく勉強になる話だ、たま
将来、十島か隊員になることを本気で考えは
じめにせんなんのでした☺



7月29日（土）

帰国式

ついに日本に帰ってきてしまってー。。。
ずっとマレーシアにいたから、たけで、
今回の体験を通して新たな
自分の幕を叶えるためにも、これから
日本で元気張らなくてか!!!



8月2日（水）

帰国表敬訪問



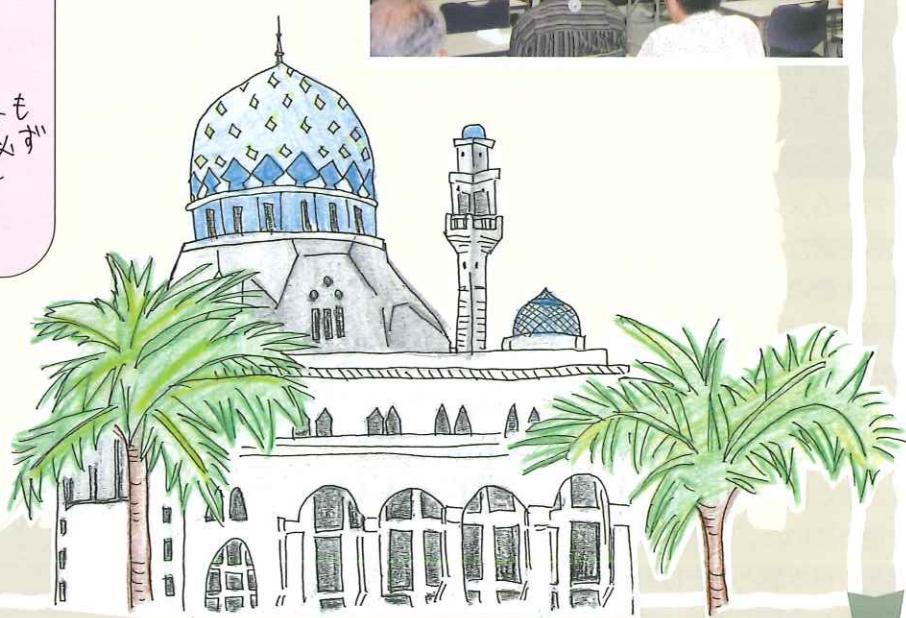
すばらしい体験がございまし
たね♪といろんな方々に
言われた今+
本当にそうだと思う!
ありがとうございました♪

8月19日（土）

帰国報告会

大成功!!!

私はまだマレーシアでしたコト、
学んだコト、ちゃんと言えたと
思う♪ キナバル山の歌も歌
えてうれしかった♪
このメンバーと一緒にいるコトも
一時なくなっちゃうけど、いつが必ず
みんなでマレーシア行こうね♪
オノコと出会えて良かった★☆



団員が感じたこと

夢の国マレーシア

甲南高等学校 2年 増留 弘亮

最初はものすごく不安だった。団員のみんなと仲良くできるか?!これが一番だった。今回の団員は男子2名で歳が3つも違った。しかも自分は第2回目の事前研修しか受けていなくてみんなとあまり慣れていなかった。マレーシアに対しては、行ったことはなかったが、初の海外というわけではなかったので、どうにかなるだろうと思い、不安は少なかった。

マレーシアに着くとそこは鹿児島空港とは比べものにならないくらい大きくてきれいだった。トイレに行くと、トイレットペーパーもあったが便器の横にホースがあった。マレーシアではお尻を水で洗うのだ!!それを見て「ああ、マレーシアに来たんだな。」と改めて実感した。村に行く前のウェルカムドリンクではヤシの実ジュースを飲んだ。スイカの皮の味がして、正直に言うとあまりたくさん飲みたくはなかった。



ホームステイ先の村、シニシアン村に着くと、伝統衣装を着た子供たちが村の特産である竹で作った楽器を一生懸命弾いて出迎えてくれた。少し話しかけると、日本語で「初めまして。」と言ってきた。事前に少し勉強していたらしく、音楽の出迎えと合わせて本当に自分たちを歓迎してくれていることが分かってすごく嬉しかった。シニシアン村はマレー系の中でも、ドゥソン族という原住民の村でマレー語とは少し違う言葉を使っていた。英語はみんな話せたので、マレー語、英語、日本語とあとは身振り手振りを織り交ぜながらなんとか会話できた。相手もこちらの言っていることを理解してくれようとして、また少しでも分かりやす

く説明してくれようとして、その気持ちが温かかった。

最初は向こうが話しかけたり、質問してくれるだけで、自分はあまり積極的に会話しようとしたが、日に日にお互いのことを少しづつ話していくようになり、帰る頃には言葉と表情でだいたい何を言いたいのか分かるようになって、それが一番感動した。家族になれた瞬間だった。村で一番驚いたことは、果物の皮などはその辺に捨ててもいいということだ。土に返り養分になるそうだ。そのあたりが日本とは違ってマレーの人の心の広さがうかがえるところだ。

ホームステイ中には、青年海外協力隊員の活動視察にも行った。そこは、日本では人から聞いたり資料で見るだけしかできない「国際協力の現場」という世界が広がっていた。特に、理学療法士の中村さんは「国際協力にはあまり興味がなかった。」と言っていたが、障害のある子供たちに向かう表情は真剣そのもので、本当にやりがいのある仕事のようだった。将来は自分もこの美しいマレーシアに貢献できるような能力を身につけてマレーシアで働くと決めた。

マレーシアの学校にも行った。自己紹介するときにApa khabar! (こんにちは) と大きな声で叫ぶと向こうも大きな声で返してくれてとても楽しかった。弓道を披露した時も興味を持って見てくれた。学校訪問後は、団員のみんなとも仲良くなれて、冗談も言い合えるようになった。村を出発する朝、お父さんが「お前は私の息子だ。また戻ってきててくれ。」と言われて泣きそうになったが、そこは笑顔で別れた。

今回の事業を通して本当に多くの人たちとの出会いがあった。シニシアン村のみんな、ちょっと変わったバスガイド、この事業に協力してくれた人たち、団員のみんな、そして同行者の大人たち。みんなと出会えたことが本当に良かったと思って、これが今回の事業での一番の収穫だった。



Terima kasih!!

鹿児島玉龍高等学校 1年 北園 優歩

Terima kasih（トゥリマ カシ）とは、日本語で「ありがとう」の意味。私は今回の体験の中で何度もこの言葉を使ったか分からぬ。

私の家族はホームステイのボランティアに登録していて、小さいころから何度も外国人の人が家に来ていた。それがきっかけで、外国人の人と関わる仕事やボランティアに興味を持ったのだが、具体的に何ができるのかまったく知らなかった。だが、この目で見てみれば何かがつかめるかもしれない。自分の将来にも繋がる疑問、そして言葉も通じない人達とどうやって過ごすのかという不安を持ちながらも、とても楽しみにしながらマレーシアへ向かった。

ホームステイ先は6人家族で、とにかく明るく優しい人達ばかりだった。まだ会って数分しかたっていないのに、一緒に歌を歌おうと誘ってくれた。歌っていると、お父さんはギターまで持ち出し、家族も歌とギターに合わせて踊り始め、私にも教えてくれた。これが家族と初めてとったコミュニケーションだと思う。会話らしい会話は全くしていないが、一瞬でいろいろな不安を消してくれた。

ホストファミリーとの生活の中で一番心に残っていることは、3日目の夜に突然開いてくれた誕生日パーティーだった。何も知らなかった私が、いつものように水浴びをしたあと自分の部屋に戻ると、家族の一番上のお姉さんが来て民族衣装を着せてくれた。写真でもとるのかと思い、お姉さんに案内されるまま家族のいる部屋へ連れて行かれると、そこには家族と近所のみんながいて一斉に「ハッピーバースデーゆうほ！」と言ってくれた。そのとき、まだ何が何なのか私は分からなかったが涙があふれて止まらなくなってしまった。



た。家族はケーキとたくさんのプレゼントまで用意してくれていて、私のマレーシアでの誕生日ということで祝ってくれた。

私の周りは人に優しくすることがあたりまえにできる人たちばかりだった。家族は私のために日本語を一生懸命覚えてくれた。日常の生活でも、できるだけ日本の習慣を優先し、無理のないようにしてくれた。日本は何一つ生活に不自由はないけれど、あのように自然に人に優しくできる人はそう多くはないのではないかだろうか。

一番不安だった言葉は家族と一緒にいる間、全く不便に思うことはなかった。伝えたいという心があれば、言葉はなくても思いを伝えることができると実感した。だから私はホストファミリーと共に過ごしている時間が一番楽しく思えた。

青年海外協力隊の活動の観察から分かったことは、どんな仕事でも国際協力に生かすことができ、とても大切でやりがいのあるものだということだ。自分ができる事をしていくことで他の人の役に立てるのは素晴らしいことではないだろうか。そのような国際協力のことをもっとたくさん日本人に知ってもらいたい。そう思えたのは協力隊の観察だけではなく、現地の人々と深く関わられたからである。



今回の訪問を通して、こんなに多くの貴重な体験と感動ができるとは全く思っていなかった。マレーシアでの1週間は、私の生活や考え方を変えてくれた。ホストファミリーの温かい心、誇りを持って仕事をしていた青年海外協力隊の姿、日本とは全く違うマレーシアの文化。この体験や気持ちは一生忘れられない。また、改めて日本を見つめることもでき、まだまだ足りない部分があることを知った。これは、今回の体験がなければ気付けなかっただろう。この感動をたくさんの人に伝え、また同じように感動できる人が増えてほしい。そして、いつかマレーシアに再び行ける日を心から待ち望んでいる。

本当にありがとう! Terima Kasih!!

団員が感じたこと

感動！私を変えた7泊8日

鹿児島大学教育学部付属中学校 3年 白石 ともみ

「えっ、ここがマレーシア？」

私は、一瞬自分の目を疑ってしまいました。鹿児島から約十時間かけてきたのは、発展途上国と呼ばれる国、マレーシアのはず。しかし、私たちの目に映っているのは、首都クアラルンプールの超高層ビルの数々と多くの人々。今までに見たこともないくらいの大都市でした。

これまで私のイメージでは、発展途上国といえば木造の建物に整備されていない道路。まさか、高層ビルや多くの車が走っているとは全く予想していませんでした。自分の考えとの大きな食い違いから始まった旅。「これからどうなるのだろう。」と不安をかくしきれない私でしたが、これが私の好奇心を奮い立たせ、マレーシアという国に対してさらなる興味を持つきっかけとなりました。

私は、ホームステイや青年海外協力隊の視察、現地の中高生との交流などで数多くの貴重な体験ができるここと、そしてなにより、外国へ行けるということで、ただ楽しむ旅ではなく、いろいろなものを「心の目」で観て、多くのことを学び、自分の視野を広げる旅にしていきたいと思っていました。

そんな私にとって、今回の旅は、感動の連続でした。一番の思い出はホームステイをしたことです。クアラルンプールとは違い、ホームステイ先のシニシアン村は見渡す限りの自然が広がり、きれいでのどかな雰囲気が漂っていました。この、マレーシ亞近代都市と大自然の融合したところにさらに感動しました。

私は、初めての海外で言葉の通じない人たちと上手



(本人：右から2番目)



(本人：後列左)

くコミュニケーションがとれるかとても心配でした。しかし、そんな心配もすぐになくなりました。シニシアン村の人々は私たちに優しく、笑顔で接してくれました。マレー語だけではなく、英語や私たちのために覚えてくれていた日本語も交えながら話し掛けてくださいました。私の緊張もほぐれ、たどたどしいマレー語ではありましたが「Apa khabar. Nama saya Tomomi…(はじめまして。私の名前はともみです。)」と多くの人に自己紹介をすることができました。

ホームステイでは、マレー料理と一緒に作ったり、お互いの国について紹介をしたり、農業体験をしたりと、多くのことを体感、実感していくことができました。言葉が通じなくても「伝えたい、伝えよう。」という気持ちさえあれば、どんな人とも分かり合えるということが分かりました。

今、ちょっと後悔していることがあります。それは、もっと話をしておけばよかったということです。そのときは、一生懸命話をしていたけれど、どちらかというと、聞き手になってしまっていました。今でも、なんだかホストファザーに「Tomomi!!」と呼ばれているような気がします。私にとっては本当の家族のようなホストファミリー。ずっと一緒にいたいと思いました。

最後のお別れは、合っているか分からぬ英語とマレー語で「I'm glad to meet you. Terima kasih!! (ありがとう)」と泣きそうになりながら言いました。

今回、数多くの貴重な体験ができたのは、一緒に行つた仲間や同行者の方々、応援してくれた家族、この体験事業を勧めてくださった担任の松尾先生、私を選んでくださった方々のおかげです。本当にありがとうございました。この体験をこれからの生活に生かていきたいと思います。

マレーシアを訪ねて

枕崎中学校 2年 藤野 真登

僕はこの国際協力体験事業を通して、大切なことを学ぶことができました。マレーシアへ初めて足を踏み込んだ時、僕はすごく驚きました。空港の国際線と国内線を結ぶ連絡通路はモノレールだったり、都市は開発途中でありながらも非常に発展していたりして、「日本はいつかマレーシアに追い抜かれてしまうのではないか」という思いに襲われました。発展途上の国というイメージしかもっていませんでしたが、序幕からマレーシアの発展のすごさを見せつけられました。

サバ州でのホームステイでは言葉が通じにくいくらい、がんばって自分の気持ちを伝えようとして、改めてコミュニケーションの大切さを知ることができました。言葉の通じる日本人が話し相手の時でも気持ちを伝えることは大切なので、言葉が通じるということに甘えず、積極的にコミュニケーションをとっていきたいと思いました。

そして、今回のメインである青年海外協力隊の活動現場を視察した時には、努力の大切さを知りました。協力隊の人たちは、マレー語を流暢に話し、現地の人と見間違ってしまうぐらい周囲の人々や文化に溶け込んでいて、自分の持っている技術をしっかりと現地の人に伝えていました。僕には、協力隊の人々の周りにあるもの全てが努力の結果に見えました。マレーシアの発展も同じように努力の賜物であり、改めて日本はマレーシアに追い抜かれるのではないか、追い抜かれてからでは遅いのだと思いました。そして、自分も今は成績が上のほうだけれど、追い抜かれてしまったら



(本人：一番右)

もう遅い。だから、追い抜かれてしまわぬようにがんばってもっと上を目指して努力しようと思いました。

コミュニケーションの大切さ、努力の大切さ、そして努力をし、その努力を結果として残している人がいること。先進国を目指して発展を目指しく続ける国があるということを学べました。

出発する前は、僕はいったい何を学べるのだろう、きっと何か特別なことが学べるのではないだろうかと思っていました。しかし、実際マレーシアに行ってみると、意外と日常の生活の中で大切な考え方を学ぶことができました。コミュニケーションの大切さは、初めから理解しているつもりでいましたが、今回実際にマレーシアに行って、本当にその大切さを実感することができました。今回得たことを今後に活かしていくたいです。そして、周りの人にも伝えていきたいです。このような事業に興味がある人はぜひ参加してほしいと思います。どんなものが得られるかは人それぞれだと思いますが、得られるものはきっとすばらしいものだと思います。



団員が感じたこと

青年海外協力隊の視察と ホームステイに参加して

枕崎中学校 1年 村田 友香

私が今回体験事業に参加したきっかけは、身内に外国人があり、その影響を受けたことです。いつか海外へ行ってみたいと思っていた、この事業に参加しました。マレーシアについて三日間の事前研修を受け、いよいよ出発の日が来ました。福岡から約6時間で首都のクアラルンプールに到着しました。開発途上国とのイメージが強かったせいか、現地を見てビルと日本製の車の多さに驚きました。私が思っていたより開かれているなと感じました。まずマレーシアのシンボルであるツインタワーを見て、高さやその造りに感動していました。翌日、飛行機とバスを利用してボルネオ島のコタキナバル近くのホームステイ先に到着しました。村の人達はきれいな衣装で踊りながら私たちを迎えてくれました。その後、ホストファミリーと対面し、親戚の方々も来てくれてうれしかったです。最も不安だったことはやはり言葉でした。でも、ホストファミリーとしだいに仲良くなり時間を忘れ深夜までしゃべっていました。ファミリーと過ごして三日目、私たちは青年海外協力隊の活動視察に行きました。隊員の一人である中村さんに話をいろいろ聞きました。子どもたちのリハビリのために一人一人マッサージを行ったり、木で手作りのイスを作ったりして、工夫されていました。私も実際に足や手の筋肉が固まってしまった人達のマッサージを体験させてもらいました。その後、小鳩さんの活動現場、職業訓練校を訪問しました。訓練校は、1999年にキリスト教の団体によって設立され、16歳から19歳の貧困家庭出身の青少年を対象に訓練しているところでした。



(本人：前列左)

家に帰ってから、家族に私の手作りのお味噌汁を作ってあげました。最初はおそるおそる食べていましたが、口に合ったらしく、おいしいと言ってくれました。ファミリーと過ごす最後の日がやってきました。朝はクンダサンという小学校を訪問しました。学校は、教室が不足しており午前と午後に分けて授業を行っているそうです。自己紹介などをして、マレーシアの伝統的な踊りを披露され、私たちもおはら節を踊って交流しました。夜は村の人達がお別れパーティーしてくれました。私は習字を書いて披露すると、珍しそうにうなずいてくれました。他にも日本の歌を歌ったり、マレーシアの歌を歌ったりとても楽しかったです。

最後の朝がやってきました。みんなに別れを告げ、お姉さんとお母さんとお父さんが集合場所まで送ってくれました。別れるのはすごく辛かったです。このホームステイ先で過ごした四日間は最高の思い出になりました。そして感じたことは、マレーシアと日本の遊びが似ていることで、野菜なども日本とほとんど一緒だったのでびっくりしました。いろんな所を見学しましたが、マラッカでの「ヤジロウ像とザビエル像」を見て、鹿児島との関わりがあったということを初めて知りました。七日間、色々なことを勉強させていただきました。この体験を通して将来何かに活かせたらという気持ちになりました。

今回この事業に参加させていただき、本当にありがとうございました。



私のマレーシア体験

蒲生高等学校 2年 新富 由利

私は期待と不安が入混じった心境で出発当日を迎えた。当日も緊張でほとんど眠れなかつたほどだった。空港に集合し、結団式をしてから飛行機に乗り込んだ。福岡空港に到着し、マレーシア行きの飛行機に乗り換えた。

マレーシアに到着してまず驚いたのは、空港がとても広いこと、ビルがとても高かったことだ。ビルはあってもそこまで高くないだろうと思っていたが、その思いを打ちのめすかのようにとても高いビルが私の目の前にいくつも建てられていた。そういう光景を見ていると、日本より発展しているのではないかと思うほどだった。ホテルもとても綺麗で、自分が考えていたのとは全く違い、考え直させられてしまった。

次の日からはマレー半島からボルネオ島に飛行機で移動し、サバ州のコタキナバル近くの村でホームステイをした。車で二時間くらいかけて村に到着した。到着した時、村の人々が民族衣装を着て、音楽とともに出迎えてくれて感動した。ホストファミリーの人たちはとても親切で私に本当の家族のように接してくれてうれしかった。だが、食事のたびに一緒に食べる人が違うので、誰がどういう関係なのか分からなくて困った。

三日目は、家族の手伝いということで、私はキャベツの包装と果物を売る手伝いをした。最初、市場と聞いていたから日本みたいな場所だと思っていたが、いざ行ってみたら出店のような場所で驚いた。キャベツの包装は見ているだけだと簡単そうだったが、実際に体験してみると想いのほか難しかった。特に根を切り落とす作業ではナイフが上手に使いこなせなくてこすった。果物売りではバナナ一束しか売れなかった。商売というのは難しいなと改めて思った。午後はみんなで合奏した。楽しかったけど難しかった。

四日目は青年海外協力隊員の活動現場見学だ。最初は理学療法士として働く中村さんを訪問した。私が「なぜ、青年海外協力隊に入ろうと思ったのですか。」と聞くと、中村さんは、「別に青年海外協力隊に入ろうと思ったのではなく、海外のボランティアに興味があり、探していたら見つけただけだ。」と笑いながら話してくれた。次に行った職業訓練校で働く小鳩さんも

同じようなことを話してくれた。嬉しそうに自分のことを話している二人は輝いて見えた。自分もいつかあんな風になりたいなと思った。

五日目は小学生、中高校生との交流だった。盛大な歓迎会をしてくれて感動した。一緒にバスケットボールをしたりして仲良くなつて楽しかった。夜には村の人々とお別れ会をした。全員民族衣装を着て、ちょっと恥ずかしかった。キロロの歌を歌つた時は泣かなかつたけど、涙が出そうになってしまった。

六日目、ホストファミリーとの最後の別れのときでもまた泣きそうになった。ボルネオ島からマレー半島に戻ってきて観光をした。七日目も観光とJICA表敬訪問をして飛行機に1泊して鹿児島に到着した。

この旅で私は色々な事を学んだし、間違った考えも直すことができた。また、この体験を色々な人に伝えたいと思った。私の将来の夢は青年海外協力隊に入つて何か役に立ちたいという漠然としたものだったが、旅の中でその夢が行く前よりもっと具体的なものなつたと思う。本当にこの事業に参加できて良かったと思うし、また同じメンバーで行きたいと思った。



団員が感じたこと

この事業に参加しての思い出

加世田高等学校 2年 峯苦 裕子

今回、この事業に参加してとても充実した日々を過ごせたと思います。私にとっては何もかもが初めてのことだらけだったので、マレーシアでの一日一日がとても印象強い思い出として残っています。

その中でも、特に印象強く残っているのはボルネオ島でホームステイした4泊5日間です。ボルネオ島のホームステイ先に移動したのはマレーシアに着いて二日目でした。赤道に近いところだと聞いていたので、暑いのだろうと思っていたが、だんだんホームステイ先の村に近づくにつれて標高が高くなり、予想に反して涼しいを通り越して寒いと感じてしまうぐらいに気候が変化していくのが不思議でした。また、滞在している間も寒いような涼しい感じの気候が続いて長袖が手放せませんでした。



ホームステイ先の村に着いたら受け入れ先の家族が民族衣装を着て踊りや民族楽器を演奏したりと、ものすごく歓迎してくれました。ホームステイ先のお母さんは、私の母にどことなく似ていました。また、職業が同じでとても他人とは思えない親近感がわいてきました。子どもたちもかわいく賢い子たちで、コミュニケーションをとるときに英語とマレー語を混ぜながら会話しました。私が表現するのに困っていたら、伝えたい事柄を汲み取って理解しようしてくれたのがうれしかったです。お父さんとはあまり話をすることがなかったのですが、とてもやさしい人でした。ホームステイ先では、夜になると親戚のお姉さんたちが来て、一緒に夕飯を食べて日本語を教えてマレー語を教わったりしました。覚えがとても早く、次から次へと

日本語を覚えていくのですごいと思いました。研修のため、家に帰るのが遅くなった日がありました。午後8時を過ぎていたのに、夕食を食べないで待っていてくれたことにとても感動しました。

家族と別れる前日の夜に荷造りをしていたら、親戚のお姉さんが部屋に来てメッセージカードをくれました。読んでみるとローマ字で日本語が書いてありとても驚きました。別れの時は別れるのが寂しくなりました。

また、ボルネオ島に滞在中には青年海外協力隊員の活動を視察しました。隊員の皆さんは現地に馴染んでいてとても楽しそうに活動していました。生き生きとしていて「いいな。」と思いました。

小学生、中・高校生との交流の時に日本の文化ということで弓道を披露したらとても興味を持ってくれました。高校生には弓を持たせて引かせてあげると、少し怖がりながら恐る恐る引いていました。初心者の人に教える時みたいに一緒に弓を持って引いてあげると「怖い。」と言っているような声をあげる人もいました。

最後に、この事業に参加して初めて海外に行き、ホームステイをして自分自身の視野が少し広くなったと思います。私にとっては進路を考え始めなければならない時期なので、進路を考える時にマレーシアでの体験を活かせたらいいなと思いました。

今回、参加できて本当に良かったです。



(本人：後列左)

ビバ！同胞

大島北高等学校 2年 緑川 菜々

7月22日、福岡発クアラルンプール行きの飛行機がだいぶ高度を下げてきたころ、窓から下を覗いた私は眼下に広がる光景に目を見張った。上空から見るとソテツのようにもみえる植物が、地面に奇妙な模様を描きながら規則正しく植えられている。見渡す限りに広がるそれは、油やしのプランテーションだった。今まで私にとって教科書に書かれた文字でしかなかったプランテーションというものの、想像以上の規模を目の当たりにして、ここがマレーシアなのだと実感した。この後空港からバスで向かった首都クアラルンプール市街では、多民族国家としてのマレーシアを垣間見ることができた。看板の文字や道行く人々の服装、ホテルの部屋で見たテレビ番組などからマレーシアに住む人々の文化の多様性を感じた。

翌23日、飛行機でボルネオ島のサバ州へと向かった。着いてみて驚いた。パパイヤ、バナナ、クワズイモなど、熱帯の地域だけあってかなり大きく育っているものの、私の住んでいる奄美大島にもある植物があちこちに生えていた。州都コタキナバルからホームステイ先の村へと車で山道を走る2時間の間、奄美大島を思い出させる風景が続いた。夕方、東南アジアの最高峰キナバル山のふもとにある村に到着し、4泊5日のホームステイが始まった。ホストファミリーと一緒に過ごすうちに、植生以外の点でもこの地域と奄美大島が似ていると気付いた。ホームステイ中、食事で冬瓜と豚肉のスープが出たことがあったが、同じ料理を奄美大島でもよく作る。また、奄美大島の方言では「あげっ」「あいー」などのフレーズが使われるが、これ



らをホストファミリーも同じような場面で使っていた。地元の小学校を訪問した際に見せていただいた伝統的な踊りの中にも奄美の八月踊りとそっくりな振り付けがあった。アジアの文化として、日本とマレーシアが共有しているものも多いということに気付いた。

青年海外協力隊員の方々が活動されている施設も見学させていただいた。「外国から支援をしにきた人」ではなく「地域の一員」として仕事をされている隊員の方々の姿を見られたことは、国際協力の姿勢を学ぶ上でとても勉強になった。

今、一週間の旅を振り返ってみると私たち日本人とマレーシアの人々との違いを見つけた時よりも、共通点を見つけた時の方が印象に残っている。街を歩くカップル、ホテルのロビーや空港にあるベンチで仮眠をとるおじさん、サバ州の専門学校や高校の生徒さんたち。服装や暮らし振りは違うが、彼らと私たちはけっこう同じだったりするのだ。しかし、日本においてはなかなかその事に気付けない。それを自分の目で発見できたことは大きな収穫だった。

ホストファミリーをはじめとするマレーシアの皆様、同行してくださった方々、一緒に参加したみんな、私にこの一週間を過ごさせてくださった皆様に心から感謝したい。

ありがとうございました。



(本人：左から2番目)

団員が感じたこと

国際協力とは

頬杖高等学校 1年 蓮子 梨那

私はボランティアが好きで、国際協力という形のボランティアがあると知って、活動内容が知りたいなと思っていた時に来たこの募集に飛びつきました。

私がこのマレーシアへの旅で一番楽しみにしていたのは、ホームステイで、その次の楽しみだったのが活動視察でした。海外で行われるボランティアはどんなものだろう。どうしてJICA（青年海外協力隊）で仕事をすることを選んだのだろうと考えてワクワクしていました。

活動視察の日、まず一人目に訪問したのは理学療法士をやっている中村さんでした。私は初め大きなところで活動していると思っていましたが、行ってみると小さな保育園みたいなところでびっくりしました。中村さんの仕事は理学療法を教えることですが、スペシャルオリンピックに参加したこともあるということも聞き、そういうこともするんだなとびっくりしました。質問の時間になって、どうしてこのJICA（青年海外協力隊）の仕事に就いたんですか、という質問が出て中村さんは「国際理解には興味はなかったんですが、仕事を探していたらこのJICAがあつて海外のリハビリ事情を知りたかった。」と答えていました。私は、国際協力の仕事をやっている人たちはボランティアや国際協力に興味があってやっている人たちだと思っていたのでこれには驚きました。子供たちのリハビリを見せてもらって日本とは違うと思ったところは、車いすがなくて外に出られないというところでした。道が凸凹で車いすは普及しないためないそうです。車いすがあればもっともっと外に出て楽しく過ごせるのになと思いました。日本でも車いすが通れない場所がたくさんあるのでそういうところを改善していくべきだと



（本人：中央）

思いました。

二人目に訪問したのは、木工をやっている小鳩さんでした。学校と聞いていたので私の通っているような学校を想像していたら、校舎はきれいで教会もあり学校という感じがしませんでした。小鳩さんの仕事は木工の仕事だけ、目的は一般教養やマナーなどを教えることなんだと聞いて日本の学校と同じだなと思いました。私が一番驚いたのは、生徒がMCというポイントを持っていたことです。校則を守らないとMCが減っていくんだそうですが、英字新聞以外の新聞を読んだり、教室でマレー語を話すだけでもMCが減るというのを聞いてびっくりしました。小鳩さんの志望動機も「ボランティアには興味はなかったけど、仕事を探していたらこれがだったので応募した。実際こっちに来てやってみると楽しくて、ずっとマレーシアにいたい。」と言っていました。小鳩さんも中村さんも、仕事を探してJICA（青年海外協力隊）の仕事に就いただけだったけど、自分の仕事に誇りを持っているんだなと思いました。二人のような人たちの存在がまた国際協力に興味を持つ人を増やすのかなと思いました。マレーシアのJICA事務所の方が「日本は本当に幸せかどうかを考えるきっかけになる。日本は便利だけど独りになっているような気がする。」とおっしゃっていました。私の住んでいるところは田舎なので近所との付き合いは多い方ですが、だんだんそれも減りつつあるように思えます。日本もマレーシアから多くのことを学ぶ必要があると思います。中村さんも小鳩さんも「マレーシアで多くのことを教えたけど、その分私も多くのことを教わった。」と言っていました。

私は今回の研修で、それぞれの国には良い点、問題点がありそこを補っていくのが国際協力なんだなと思いました。一人一人がやれることを自分からやる。これが国際協力の第一歩だと思います。

私は、この研修で学んだことをまず自分の周りから少しでも多くの人達に伝えていきたいです。



異文化の暮らしに触れて

串木野高等学校 1年 丸久 あかね

異文化の暮らしに触れ、先進国である日本での生活や自分の将来について見つめなおす。後悔しないようになんでもトライし、チャレンジする。これが私の旅の目標でした。中学2年の夏にアメリカでホームステイをした際、英語力が不十分だった私はホストファミリーに上手く思いを伝えることができませんでした。それなのに今度はマレー語を覚えないといけないというプレッシャー。第1回事前研修で私は弱気になってしましました。でも第2回事前研修でマレー語やマレーシアの事について勉強しているうちにだんだんと興味が増し、楽しくなってきました。出発の日、福岡空港から5時間半を経て到着したクアラルンプールは、高いビルがたくさん建ち並び、見るもの全てが驚きの連続でした。クアラルンプールから飛行機で約2時間、バスで山道を2時間経て着いたホームステイ先のシニシアン村では、村の人々が民族衣装を身にまとい、楽器を鳴らし私たちを出迎えてくれました。私の頭の中からは不安という言葉は消え、ただただ村の人々の歓迎が嬉しかったです。発展途上国と聞いていたのですがテレビ、冷蔵庫などの電化製品はもちろん、食べ物にも困っている様子もなく、市場には野菜が並べられ、ホームステイ先にはたくさんの電化製品が揃い、さらには携帯電話までありました。日本と変わらない生活をしていました。ホストファミリーはホストママと子供たちが不在でホストパパと過ごす日が多くたですが、初日から一緒に料理を作ったり、マレーシアの遊びを教わったり充実した生活を送ることができました。



(本人：一番左)



旅の目的のひとつでもある青年海外協力隊の視察。私たちは、理学療法についてのアドバイスを障害者の父母にしたり、講習会を開いたりしている中村さんと、職業訓練校で子どもたちに木工を教えながら仕事に対する姿勢も教えている小島さんの所を訪問しました。お二人とも現地の人々に自分の持っている技術を提供するとともに、現地の人々からもたくさんのことを取り、お互い助け合いとても楽しそうで生き生きとしたその姿は自信に満ちあふれていました。

私の将来の夢は栄養士になることです。おいしいものを口にし、お腹いっぱいになると人は幸せを感じます。もちろん私も食べることが大好きです。栄養士になることはとても難しいですが、言葉も伝わりにくく異国の地でがんばっている青年海外協力隊のお二人を見て勇気をもらいました。本当に良かったです。

私にとってこの1週間は、民族衣装を着たり、マレー料理を食べたりするなど日本ではできないたくさんの経験をし、大切なことを学ぶことができました。マレー語があまりわからない私にホストファミリーや村の人々は日本語や英語で話してくれ、わからない言葉があったときは辞書で調べてどうにかして伝えようとしてくれました。マレーシアの人々の優しさ、温かさ、何もかも私にとってよい思い出になりました。マレーシアのよさはもちろんですが海外に目を向けることで日本のよさに改めて気付くことができました。これから先、この経験を少しでも将来に役立てることができますとと思います。この体験事業を支援してくださった皆様、ありがとうございました。楽しかったです。

団員が感じたこと

私を変えたマレーシア

甲南高等学校 1年 吉満 瑞貴

私はこの体験事業に参加させてもらい、自分は大きく変わったのではないかと思う。

7月22日、日本を発ちクアラルンプール国際空港に着いた。そこは発展途上国の空港とは思えないほど大きくてきれいだった。空港内にはモノレールが走っていた。クアラルンプール市内も同じだった。建ち並ぶ高層ビルの数に私は驚かされた。

翌日、飛行機で約2時間半かけてボルネオ島に渡った。サバ州の州都でもあるコタキナバルは熱帯性気候のマレーシアらしい、うだるような暑さだった。しかしホームステイ先のシニシャン村に近づくにつれ、徐々に涼しくなっていった。同時に車の窓から見えるキナバル山がどんどん大きくなってきた。そして村に到着。民族衣装を身にまとった村人たちが、楽器を手に私たちを出迎えてくれた。車から降りると、いきなり一緒に踊ることになった。最初は戸惑いがあったが、慣れてくるとすごく楽しかった。その後、部屋の中で歓迎式とホストマザーの紹介があった。私のホストマザーはルシアさん。いよいよホームステイが始まると、その時、大きなハプニングが起きた。何かの手違いでルシアさんは、自分の家にホームステイするのは私ではなく藤本さんだと思っていたのだ。結局、私たちは二人とも一緒にホームステイすることになったが、このハプニングで私はすごく不安になった。ルシアさんは本当は私じゃ嫌だったので、と思ったからだ。でも、そんな不安を抱いていたことさえ忘れるほど、ホームステイ期間中、ルシアさんをはじめとするホストファミリーは皆、私にとても優しかった。



私のホストファミリーは民宿をしていて、キナバル山が見えるとても眺めの良いところに家があった。私が想像していたマレーシアの家より大きくてきれいだった。私はこの家とホストファミリーと村が、すぐに大好きになった。

村を発つ前日の夜。私たちのお別れパーティーが開かれ、ホストファミリーに民族衣装を着せてもらい参加した。そしてパーティーの後半に、みんなでキロロの「未来へ」を歌った。この曲はなぜかマレーシアでヒットしていて、私もよくホストファミリーと一緒に歌っていた曲だった。舞台の上で歌っているとホストファミリーと過ごした日々のことが思い出されてきて、私は涙が止まらなかった。すると、ルシアさんが私のところまで来て、私を抱きしめて一緒に泣いてくれた。私はすごく嬉しくて、ますます日本に帰りたくないなった。しかし、その翌日、私たちは後ろ髪を惹かれる思いで村を離れた。

私は、自分自身が一番変わったと思うのは、発展途上国についての考え方だ。発展途上国は貧しい=先進国より不幸せ。これが今までの私の考え方だった。でも実際は発展途上国の方がお金では買えない、本当の幸せがある場所のように見えた。



そしてもう一つ、私の将来についての考え方も変わった。マレーシアをはじめとする発展途上国は、これから発展に伴いゴミ問題等の環境問題が深刻化してくると、JICAマレーシア事務所の職員の方がおっしゃっていた。大好きなマレーシアが発展していくことは嬉しいが、日本のようなゴミであふれた国になってほしくないと強く思った。だから私は将来、青年海外協力隊になってマレーシアなど、発展途上国の環境問題解決のために働きたいと考えている。

このように私を大きく変えたマレーシア。今回この素晴らしい体験事業に参加できて本当に良かった。Terima kasih. (ありがとう)

国際協力に触れて

松陽高等学校 1年 田畠 梓

私がこの体験事業に参加した動機は、外国に興味があつたこと、青年海外協力隊の活動に興味があつたことの二つです。去年姉がボランティアでインドのマザーハウスに行きました。話を聞く度に、いつか私もそういった事業に参加したいと思っていました。そして、この体験事業があることを知り、是非参加したいと思いました。特に、青年海外協力隊の活動現場を視察するということにとても関心を持ちました。自分と同じ日本人が一人外国でがんばっている姿を見ることで、もっと自分自身の視野を広げることができるのではないかと考えていたからです。



結団式を終えて、飛行機に乗り離陸すると共に急に不安になってきました。初めて日本を離れ、言葉もあまり通じない国へ行くことがこんなにも心細いことだとは思っていませんでした。しかし、一緒にマレーシアへ行くメンバーと話をしていると、それまでの心細さはなくなっていました。

長い間飛行機に乗り、バスにゆられながらようやくホームステイ先の村へ到着しました。不安をもなくしてくれるような温かい出迎えが本当にうれしかったです。私たちのために、歓迎パーティーも開いてくれました。子供たちのかわいらしい歌や踊り、おいしいコーヒーやお菓子、現地の人の心遣いがとてもうれしかったです。ここまでみんなと一緒にいたけど、そこからは一人でホームステイです。再び不安になり、ホストファミリーの人と上手くやっていけるだろうか、言葉は上手く通じるだろうか、そんなことばかり考えていました。しかし、ホストファミリーの紹介をされた

時、おばあちゃんがギュッと抱いてくれて温かさを感じ安心しました。

ホームステイ先に着くと、家族みんなそろって迎えてくれました。子供たちもすごくかわいくてすぐに仲良くなれました。この日の夜は本当によく眠れました。これから日を増すごとに本当の家族のようになればいいなと思いました。

次の日は、一日中家族と過ごせる日でした。お父さんにいろいろな場所に連れて行ってもらいました。どんな景色にも感動しっぱなしでした。村の人は、みんなが親しげで、人と人との繋がりがとても深いものに思いました。

村から離れて、青年海外協力隊の活動現場視察を行きました。最初訪れたのは理学療法士の中村隊員でした。外国に一人で来て働いているという事への不安などは一つも感じられないほど、生き生きとしていました。自分はこの仕事が好きでたまらない、この仕事に誇りを持っている。そういうオーラがありました。一つの事をこんなにがんばれるというのはすごいことだと思います。それに、自分から現地の人に教えることもあれば、逆に教えられることもたくさんあるのだから、すごくぜいたくな、素晴らしい仕事なのではないかと思いました。

次に、モンフォート職業訓練校で働く小鳶隊員の所へ行きました。「滞在期間が過ぎてもここにいたい。」と言っていました。この二人の共通点は、マレーシアが大好きだという気持ちと自分の仕事に誇りを持っていることだと思います。私もこんな仕事につきたいと強く思っています。



この体験事業を通して、マレーシアに家族をつくることができました。そして、マレーシアの本当の姿を知ることができたような気がします。今まで私が知っていたマレーシアはほんの一部だったと思います。だから、これを機にもっと世界に目を向け本当の姿を見ることができればいいと思います。

団長報告

キナバル山に育まれて

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
事務局長 弓場 秋信

出発の朝、鹿児島空港での団員は不安と期待が交差する複雑な顔である。一人一人に声を掛けるが返事がきこちない。それでも結団式では流暢なマレー語による自己紹介と抱負を述べる団員を前に武者震いを覚え機上の人となった。マレーシアの首都クアラルンプールに到着した団員は、近代的な空港設備と中心街の高層ビル群に目を見張り、鹿児島より発展している姿に「開発途上国」の意味が理解不能に陥っている。

マレー半島からサバ州都コタキナバル空港に到着後、一行より先に出口に向かい出迎えの中に「KAGOSHIMA」の文字と、昨年マレーシアホームステイ協会の一員として鹿児島に見えたWALAI TOKOU（ドゥソン語で自分の家）ホームステイ協会のMr. Kohaideを探すが見当たらない。不安が頭をよぎる。旅行業が正業でないKohaideさんとの直接交渉でホームステイ受け入れをお願いしたが大丈夫？ 待つ事10分、ミニバス2台と共に現れた。出迎えは僅かの遅れであったが今後の日程について細部の打合せが必要と感じ、団員とのミニバスではなく彼の車でホームステイ先に向った。通訳の手配をお願いしていたが、サバ州内で日本語を上手に話す人を見つけるのは難しいとの事。協力隊員時代に覚えたマレー語を思い出ししながら通訳を務めざるを得なくなる。

マレーシア初の世界自然遺産に登録された東南アジア最高峰キナバル山麓クンダサン地区シニシアン村に到着。黒に金色の刺繡が施された、マレー系とは異なる民族衣装に身を包んだ大人達の民族楽器演奏と子供たちの歌と踊りの歓迎を受け入村した。ボルネオ島最大の先住民族ドゥソン族が住むイスラム教徒の村である。対面式でホスト家族の紹介を受けそれぞれの家庭に散っていく団員の表情を観察しながら、後ほど各戸訪問する旨を伝え励まし送り出した。

ホームステイ先では、団員が持参した遊び道具、土産、鹿児島県のパンフレット、指差しマレー語会話帳、英語、日本語、ジェスチャーなど、可能な限りの全てを駆使してのコミュニケーションが各家庭で始まった。そして1夜明けた団員に曇りのない笑顔が見える。

シニシアン村は標高約1100mの高原。スコールの後は衣服をさらに1枚重ねないと寒く、熱帯夜とは無縁

の地である。約500人が住む村一帯は、高原野菜の産地でレタス、キャベツ、ネギ、大根、人参等を日本から輸入した種子で栽培し大消費地に出荷している。また周辺にはリゾートホテルが点在する自然環境に恵まれた豊かな村である。

滞在中、青年海外協力隊員としてサバ州公共福祉サービス局で州内11ヶ所の地域リハビリテーションを巡回指導している理学療法士の中村隊員、そして社会的弱者や脱落者を受け入れているモンフォート職業訓練校で木工を教えている小鳩隊員の2ヶ所を訪問。マレー語を操りながら現地に溶け込み活動する両君は、生きがいと誇りを持っていた。経済優先の中で、置き去りにされがちな分野の人々と共に汗を搔き活動する協力隊員は、現在世界76カ国で2530名に上る。彼らの健勝を祈らずにはいられない。

地元のクンダサン小学校、クンダサン中高校訪問は、予期せぬ熱烈な歓迎で始まった。児童・生徒そして父兄も参加してのマレーシアの歌や踊り、団員によるマレーシアと日本の歌や弓道の披露、そして最後には現地の人々も合流しての「おはら節総踊り」である。学生同士の住所交換が始まる中、クンダサン中高校の校長と父兄より日本語教師の派遣を要請される思わぬ成果がもたらされた。

4泊5日のボルネオ島でのホームステイ、吉都マラッカと首都クアラルンプールでの滞在。3ヶ所の訪問地はそれぞれの目的の下に決めた。発展する都市部、人間らしい生活を送る村、異教徒が平和に共生している社会、鹿児島との歴史的繋がり、国際交流と協力。

将来の進路を探す旅でもあった12名は、意図した目的以上の成果を上げ清々しい笑顔と共に帰国した。



同行者感想

団員の成長

(財)鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
上片平 文裕

解団式の場で、団員一人一人が堂々と感想を述べているのを見ながら、「この事業は、子供達を大きく成長させるんだ。」ということを改めて感じました。

この事業のため、団員と本格的に接したのは、6月に1泊2日の日程で行われた宿泊研修が最初でした。まだお互い知らない者同士という緊張感のせいかかもしれません、この時の団員に対する印象は、講師の言っていることにあまり反応がない、誰かがしてくれるだろうという感じで積極的な行動や発言が見られないというもので、この事業の目的を理解してまとまってやっていけるのかなという不安がよぎりました。

このような不安を持つつ、ホームステイ先であるシニシアン村に着いたその夜、団員の様子を見に各家庭を回りましたが、どのタイミングでホストファミリーに話しかけていいのかわからず戸惑っている子もいました。しかし、ホームステイ先に慣れるに従い、少しずつではありますが、子供達は着実に変わってきました。もちろん、頼れるのは覚えたての拙いマレー語と英語だけという環境が積極的に動かないと何も先に進まないというふうに子供達の意識を変えていったのかもしれません。しかし、一番大きかったのは、シニシアン村の人達の繋がりの深さと温かい心、そして青年海外協力隊の方々の仕事に打ち込まれている姿にあったのではないかと思います。ホームステイ先では、近所の子供達が普通に隣の家に出入りし、まるでそこの家族のように過ごしていて、地域の一体感を非常に強く感じました。おかげで、どの子がその家の子供なのかはっきり分からぬままに終わってしまう家



庭もありました。当然ながら、どの家でも、ホストファミリーは常に団員を家族の一員として接してくれていました。また、青年海外協力隊員の方々は、持っている知識や技術で地元の人を指導するのではなく、ジレンマに悩みながらも地域に溶け込み、地域の実状に合ったサポートのあり方を地域の人と一緒に考えながら活動していました。

このようなホストファミリーの温かさや青年海外協力隊員の方々の地元の人と一体となって1つのことに打ち込む姿に触れることで、団員達は自分自身のことを振り返り、そして変わっていったように感じます。

実際、小学校や中学校を訪問した時の団員は、物おじせず堂々と自己紹介や日本文化の披露を行い、マラッカでは、団員が一致団結してあるとても楽しい企みを実行し（詳細はあえて伏せておきますが）、そのままでとても感動を覚えました。

ある団員がホームステイの後半に、「鹿児島での生活は本当に幸せなんだろうか。」ということを言っていました。ご家族の方が聞かれたらびっくりするような発言かもしれません。しかしそれは、ホームステイ先での体験や青年海外協力隊員の方々の姿を目の当たりにして、見たことや感じたことを自分自身のこととして受け止め、そして今までの自分を振り返ることができたからこそその言葉だと思います。

また、ある団員はマレーシアの抱える現状をJICAの方から伺い、将来の進路について考えるきっかけにしました。

この言葉や行動に象徴されるように、わずか8日間の中で、この事業を通じて子供達はそれぞれ成長し、何らかのものを掴んだようです。今後、子供達がこの掴んだものを決して放さないように、マレーシアで感じた気持ちを持ち続けてもらいたいと願うとともに、私たちもできる限りのお手伝いをしていきたいと思います。

最後に、このような機会を提供してくださり、子供達の成長をサポートしてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

余談ですが、私自身はというと、団員の子供達があきれるくらいに、ドリアンをはじめマレーシアの食事が口に合ってしまって、日本に帰国してからは、スーパーに行く度にマレーシアの食材や香辛料がないか探してしまう日が、しばらくは続いてしました。

Terima Kasih!

同行者感想

心つながる感動体験

青年海外協力隊OG 田邊 ツル子

第15回鹿児島県青少年国際協力体験事業に「健康管理」の担当として同行し、12名の団員と共に2回の事前研修・7泊8日の旅・表敬訪問・報告会と参加させて頂きました。

2回の事前研修は、国際協力について考える、マレー語研修、イスラム文化理解、日本文化紹介を兼ねた歌や踊りなどの交流準備と大変充実した内容で、青年海外協力隊OGである私にとっては、13年前に参加した協力隊派遣前の事前研修を懐かしく思い出しました。そして、この事業を通して12名の団員がどのように成長していくのか大変楽しみとなりました。

7泊8日の旅は、団員の「健康と安全」が全ての基本、12名の団員が心に残るすばらしい体験ができるよう、あらゆる場面で十分サポートしていこうと心に誓い緊張しながら出発しました。いよいよ旅が始まり、乗り物酔いやちょっとした頭痛・腹痛などもみられましたが、しばらくすると回復し、大きな病気もなく全日程をこなすことができたことにホッとしています。これも、日頃から団員の一人一人が自分の体をよく知り、健康管理に努めていたからこそと感謝することでした。また、「病は気から」といわれるよう、人は目標を持って楽しく活動している時、また充実感を味わっている時、人と人とのつながりを感じる時、心も体も元気だと再確認させられました。そして、海外だからこそ、国内にいる以上に健康管理の大切さを考えさせられました。

また、これまでごちなく遠慮がちに見られた団員同士の関係が、シンシアノ村での熱烈な歓迎会に始ま



(本人：右後方)

り、ホストファミリーとの交流、小・中高校での交流などを通して、目に見えて変化していき、一人一人の表情がどんどん輝き出しました。マレーシアの人々の一生懸命な姿と優しい心遣いが団員の心に響いたのだと思います。

一番変化が見られたのが、小学生との交流でした。学校をあげての歓迎ぶりで、ステージでくり広げられる可愛い小学生の民族舞踊や歌に圧倒され、その一生懸命な姿に「自分たちも頑張ろう」という気持ちが自然にわいてくるようでした。また、団員が発表する日本文化の紹介（弓道や日本の歌、おはら節など）に大変な興味を示し、会場が大変な盛り上がりとなりました。温かく盛大な拍手と「ありがとう」と日本語で連呼する小学生のひたむきな姿に、自分たちを温かく受け入れていること、お互いの心が通じ合っていることが実感できた瞬間でした。団員の心に大きな感動が生まれ、これまでに見せたことのないびきりの笑顔には、自信とたくましささえ感じられました。

この体験事業の大きなねらいである、青年海外協力隊の活動現場の視察では、現地の人々の中にとけ込んで生き生きと活動する2名の隊員の姿に、現地の人々との心のつながりがはっきりと感じ取れました。中・高校生にとっては、自分の進路を真剣に考えるこの時期に、その姿に多くの示唆を与えられる感動体験になったようです。

「異文化との出会いinボルネオ島」の旅では、多くの人々との心のつながりを感じることができました。それは、民族や文化・言葉の壁を超えたマレーシアの人々はもちろん団員同士（同行者も含めて）、感動体験を通じて互いの心が通じ合い、強い絆で結ばれたように思います。また、いろんな方々に支援頂いているこの事業には、これから鹿児島を担う青少年に対する温かい思いが込められ、心のつながりで支えられているということも実感しました。

この国際協力体験事業を実際に体験する機会を頂きましたことに心から感謝しています。この経験を多くの方に伝えると共に、これから教育活動に心つながる感動体験を多く取り入れていきたいと考えています。

カラダとココロで国際協力

JICA国際協力推進員 原 奈美

「国際協力って何ですか?」、「異文化理解って何ですか?」と問いかけた第2回事前研修。今回派遣された12名の団員たちは、素直な気持ちで答えてくれた。「募金」、「外国のことを知ること」など、出てきた答は日本社会の中にいればごく普通の一般的な答だった。答は決して間違ったものではないが、どことなくとつつけたような答。なんとなくそう思うだけだという表情は隠せない。マレーシア、ボルネオ島での1週間。団員のこの答がどのように変化していくのか楽しみであった。

第2回目の研修で、時間通りに集まらなかった団員達に怒りを見せた私は、密かに「コワイ存在」であったようだ。海外での団体旅行。それも旅行業者の添乗員もつかないような村へ行くのである。「連れられて行く」のではなく、自ら足を踏み出す姿勢でいてほしかった。

「コワイ存在」がかえって良かったのか、1週間の旅行中、団員同士、お互いの行動を気にする姿勢が芽生え、同行者としては余裕を持って子どもたちを見守ることができた。

団員は、限られた時間の中、旅行中で体力を消耗していることにも気付かずに、体いっぱい、心いっぱいを使って、目の前にあるすべてのことを吸収していた。こんなにも笑う子、こんなにも泣きじゃくる子、本来持っているそれぞれの感情が素直に現れてくる。報告会のビデオを見たあるお母さんの「我が子のこんな姿を見たことがない」ということばが思い出される。日本での忙しい学生生活の中では、なかなか現れることがない表情だったのかもしれない。そんな団員の姿を見ることができた私は幸せだったのだろう。

女性軍団に圧倒されてはじめどうか心配していた子は、すっかりその中心へと入り込んでいた。マイペースでクールな印象だった子は、笑って泣いて表情がほぐれてきた。しっかり者だけれど慎重でおどおどしていた子は、笑顔で大きな声を出すようになってきた。緊張してそわそわしていた子は、余裕を持って行動できるようになってきた。口数が少なくおとなしくしていた子は、自己主張するようになってきた。人見知りをして殻に入っていた子は、殻を突き破ってパワー全



(本人：一番右)

開、誰よりも目立ってきた。落ち着きの中に不安が見え隠れしていた子は、持ち前のペースで上手にコミュニケーションしていた。どんな状況にも動じない子は、いつの間にか現地の人となっていた。不安で元気がなくなっていた子は、持ち前の明るさに加えて自信を得ていた。感受性豊かな子は、ひとつひとつの場面を全体で感じ取り、満ちあふれる笑顔をふりまいていた。冷静沈着な子は、感じては考え、感じては考えて、自分の力に換えていた。警戒心が強い子は、少しずつマレーシアの世界を覗きながら自分をさらけ出してきた。

帰国後行われた報告会で、団員たちが述べた「国際協力というのは、とても難しいことではなくて、自分ができることからやればいいということがわかりました」ということば。立場上、国際協力を推進するためには「国際協力とは、『外国』のことではなく、日本にいるあなたの身の回りのこととつながっているのですよ」と講座を開き、相談を受け、日々格闘している私にとって、子どもたちから私が懸命に伝えようとしていることがこんなにもすんなりと出たことに軽いショックを受けた。それと同時に、体と心を使って何かを感じ取ることの偉大な力を改めて感じた。これから未来を担う子どもだけではない。子どもを育て見守る私たち大人も一緒に体と心を使わなければならぬと、日本からマレーシアでの日々を振り替えり、今そう思う。

同行者感想

成長うれしい夏

南日本新聞社 藤本 祐希

実は2年前にも、県青少年国際協力体験事業で、マレーシアへ出発する中高生を取材したことがあった。その時は、社の都合で同行が許されず、空港で「見送り・出迎え」をしただけ。しかし、旅立ち前と後では、子どもたちの表情がまったく違ったのが印象的だった。今回、中高生12人とマレーシア行きが決まった時、子どもたちがどんな風に変わったのか、この目を見てみたいと思った。

そしてマレーシアでの日々。現地の子どもたちの澄んだ目、異なる民族・文化の中で暮らす人々、そしてキナバル山に代表される自然。子どもたちの目は、みるみる輝きを増していく。初めて会ったときは、口数が少なくて、「大丈夫かな。現地の人と話せるかな」と心配になるような子も、帰国後は胸を張って自己紹介ができるようになっていた。はじめはぎこちなかった子どもたち同士の関係も、日に日にうち解け、笑い合い、助け合う関係になっていた。旅の終わりに、現地の鍋「スチーム・ボート」にみんなで仲良く「食らいついで」いた食欲旺盛な姿が、おかしくもたくましい、そして嬉しい光景だった。

現地の商店は、国境を越えて販売される世界的大企業の家電や衣類であふれ、日本人の著名建築家が設計した巨大なクアラルンプール国際空港は、熱帯森林を切り開いて開発された広大な油ヤシのプランテーションの中にあった。またクアラルンプールでは、イスラエルの軍事行動に抗議し、どしゃ降りのスコールの中、ビル街の道路を埋め尽くすイスラム教徒のデモ隊にも遭遇した。子どもたちは、世界経済の中にあるアジア、現地の宗教、文化、気候を目の当たりにした。あの光景を当時どうとらえたかは、子どもたちそれぞれで違うだろう。しかし、あのような体験をしたという事実は、彼らのこれから的人生で間違いなく財産になると思った。

帰国後の報告会には、2年前にマレーシアを訪れた彼らの先輩も顔を出していた。すっかり大人びた表情をし、就職したり、勉強に励んだりと、それぞれの道



を歩んでいるという。自分たちの後輩の姿を眺める彼らの目は、とても温かく、ともに「世界を見る目が変わる」という体験を共有する仲間が増えた喜びに満ちていた。遠い異国の地で、自分や人とのつながりを見つめ直す体験が、人生にとってどんなに有意義か、ほかの子どもたちの書いた文章を読んでもらえば分かると思う。十代という人生で最も可能性豊かな時期に、このような経験ができる彼らを、実はとてもうらやましく思った。可能性豊かなこうした子どもたちの後輩が、今後も同事業で、次々と旅だっていくことを願っている。

日本とシニアン村の架け橋に

KKB鹿児島放送 松本 久美

「松本、ジャングルに行ってみるか」上司に言われた一言からマレーシア行きが決定した。タイにもシンガポールにも行ったけどその間のマレーシアには行ったことがない!車の中でもマレー語のCDを聞き、はりきって「スラマッ パギ! (おはよう)」なんて言いながら通勤した。

事前研修で初めて参加する子どもたちと顔を合わせた。緊張した表情の子どもたち。ましてや、最年少は12歳。けれど自分が中高生の頃、1週間も親元を離れて海外でホームステイ体験なんて考えも及ばなかつたことをこの子達は今から挑戦しようとしている、そのことだけでも私は尊敬のまなざしで見つめた。

7月22日、鹿児島は朝から大雨。そんな天気も吹き飛ばすように、私の心は晴れ晴れとしていた。まだまだぎこちない子どもたちのマレーシアでの変化ぶりが何よりも楽しみだった。

シニアン村でのホームステイ初日の夜は、それぞれの子のホームステイ先を回った。不安そうな子、早速家族との会話を楽しんでいる子、様々でその瞬間の表情をおさえた。特に不安そうな子の表情の変化は一番楽しみだった。きっとこの旅で素敵なものに変わってくれるはずー、その確信が私の中であった。

ところで子どもたちに負けず劣らず私も苦労したのが、ホームステイ先での家族との交流だった。マレー語が話せないのは当然のこと、さらに私の英会話能力は高校時代から確実に低下している。それでも事務局の人と一緒に安心と高をくくっていた私に神様は試練を与えてきた。村に着いてから1人での滞在に変わってしまったのだ。不安はいっぱいだったものの、それでも子どもたちに負けないように、マレー語の指差し会話帳片手に単語をつなげて頑張った。ホストパパ・ママが私と意思疎通が図れず、会話に苦労している表情は忘れることがない。4日間も飽きずにつきあってもらい、感謝の気持ちでいっぱいだ。

「国際協力」それは漠然としたもので、特に青年海外協力隊員については、国際協力をきちんと理解している人だけが参加すべきもの、そう感じていた子達も多かったと思う。しかし、隊員の自分の見解を広げたかっただけという話に加え、日本では学べない人のつ

ながりなどがマレーシアには多くあることを聞いた子供たちが訪問先のJICAで発表した、「隊員1人1人が自分の仕事に誇りを持ち、輝いていた。私も輝きたい」

「今後、自分は途上国に対して、どういうことをしていけるのか真剣に考えてみたい」という感想。それを聞いて、たった1週間で、将来の道まで視野に入るようになった子達を頼もしく思った。

シニアン村では、日本の重機をよく見かけた。道路などの工事は日本の企業が行っているとのこと。意外なところで、この村と日本がつながっていることを知った。国民学校でも日本語の授業を希望していることを聞き、シニアン村に初めてホームステイした日本の子どもたちが、今後さらなる日本と村との架け橋になっていくのだと思った。

帰国後の報告会。シニアン村が大好きと語る子どもたちの表情を見て、そして去年の参加者からの「将来の夢が変わったのは何人ですか?」との質問に全員が手を上げたのを見て、この1週間は子どもたちにとって多くのことを吸収できた、大きな影響があった、とても意味ある旅だったことを改めて感じた。



「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 楽 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派 遣 先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派 遣 者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

鹿児島県青少年国際協力体験事業の実績

	派遣国（地域）	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祇答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スブルンペラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 須恵町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 姶良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンポン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祇答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祇答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県を 予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフル エンザの影響により中止			市町村 推薦予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレングヌ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市国 際交流協会, 国分市国際交流協 会, 知覧町実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦



記念ボード

私たちの名前がいつまでもシニシアン村に…



= 編集・発行 =
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒892-0816
鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階
(財)鹿児島県国際交流協会内
TEL : 099-221-6620 FAX : 099-221-6643
挿し絵: 田畠 梓 (松陽高等学校1年)
吹き出し: 吉満 瑞貴 (甲南高等学校1年)

